

目次

第18回大会に向けて	1	留学雑感	9
2005年度研究集会関連	1		
日中社会学会のあゆみ	6	事務局からのお知らせ	15
調査ノートから	7	編集後記	16

■第18回大会に向けて

大会担当理事 過放

日中社会学会第18回大会は、6月3日、4日の両日、島根県立大学（大会実行委員長：唐燕霞会員）で開催されます。

①「報告要旨」の書式、②自由報告の参加申込、③「報告要旨」の宛先、④お問合せ先を下記にお知らせします。

①「報告要旨」書式

・A4用紙、40字×40行、明朝体で10.5ポイント、横書き、2頁とする。

- ・氏名、所属、報告題目を明記のこと。
- ・そのまま複写されることを念頭に作成してください。それ以外の資料には当日配布としますので各自で用意してください。

②「自由報告」の参加申し込みについて

- ・「自由報告」は、封書による「報告要旨」の送付をもって申込とします。
- ・申込締切は4月21日（必着）とします。

③「報告要旨」の宛先

- ・〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1-1 桃山学院大学社会学部 過放研究室

④お問い合わせ先

- 過放研究室
- 電話：0725-54-3131（代）内線3927
- E-mail: guo927@andrew.ac.jp

■2005年度研究集会関連

首藤明和（庶務理事・研究プロジェクト）

2005年度研究集会在、2005年11月26日、27日の2日間にわたって開催された。1日目の会場は、筑波大学東京キャンパス・附属学校教育局・第一会議室、2日目の会場は、流通経済大学新松戸キャンパス8F802教室であった。会場の手配や設営などにお骨折りくださった会員の方々にお礼申し上げます。

報告者および報告題目は以下の通り。

●11月26日（土）

○第一部

- ・李洋陽（東京大学）「中国学校教育の日本人イメージ——国語・歴史教科書と愛国主義教育映画に対する考察を中心に」
- ・野村弘美（一橋大学）「中国における情報化政策の展開」
- ・石井健一（筑波大学）「中国人の日本ブランド志向と対日意識」

○第二部

- ・飯田哲也（立命館大学）「現代中国の生活変動——階層分化を軸に」
- ・坪井健（駒澤大学）「在日中国人留学

生の動向——留学生調査 15 年より」

司会：首藤明和（兵庫教育大学）

● 11月27日（日）

- ・ 首藤明和（兵庫教育大学）「漢人『家族圏』の形態と論理——その重層性と伸縮性に着目して」
- ・ 陳立行（日本福祉大学）『『社会福祉』から『社会福祉』へ転換の可能性の分析』
- ・ 中村則弘（愛媛大学）「民衆文化と中国の社会変動——新たな社会構想の模索のために」

司会：東美晴（流通経済大学）

以下、研究集会でなされた報告ならびに討論について、当日、司会を務めた首藤（1日目）、東美晴会員（2日目）より概要報告しておく。

1日目は二部構成で行われた。第一部は、「中国の情報化とその影響」、「日中関係とメディア」に関する報告からなり、第二部は、「現代中国の生活変動」を基調論題とする報告で構成された。

第一部、「中国の情報化とその影響」に関して野村弘美会員は、中央政府による情報化政策を時系列的に概観し、制度の面から中国の情報化にみる独自性を説明しようとした。具体的には、①情報化政策の主管部門、②ハイテクとしての情報技術の開発、③情報通信とインターネットの登場、④情報化の拡がりについて考察がなされ、まとめとして、①中国での情報化は経済活動に関連するものであり、言論や文化活動の情報化進展には慎重で、それゆえに、管理（規制）が実行されている、②情報化の推進と管理

（規制）という「二重」の政策を実行するために行政が役割分担をしてきた、③近年、国家電子情報産業基地の設立という新政策が示されたことで、これまでの行政の役割分担が今後も継続するかは不明であることなどが報告された。これを受けてディスカッションでは、①情報化における「管理」と「規制」の概念定義および具体例、②「政策」以外の側面から見えてくる中国独自の情報化、③各「政策」のもつ効果、などをめぐって議論がなされた。

「日中関係とメディア」に関しては、李洋陽会員と石井健一会員から報告がなされた。

李洋陽会員は、1990年代半ばから悪化し始めた日中関係に着目し、「反日感情の高揚の一因は中国の学校教育にある」という「通説」を検証した。

中国人の対日イメージの形成に関する先行研究の整理から、①歴史教科書に限定した考察がほとんどで国語教科書や愛国主義映画の影響についての考察が十分ではない、②「日本イメージ」に比して「日本人イメージ」への分析が十分でない、③学校教育による日本人イメージ提示について、その効果に関する考察がなされていないことなどを述べ、問題の所在を明確化した。その上で、①国語教科書、歴史教科書、愛国主義教育映画の内容をまとめ、②李会員が実施したアンケート調査の分析を通じて学校教育の学生に対する日本人イメージ形成の影響を分析した。その結果、①愛国主義教育映画は大きなインパクトをもつ、②学校教育の影響を受けて学生たちが形成する日本人イメージには、日本帝国主義や日本政府に対してはネガティブなイメージが、日本国民に対してはポジティブなイメージがみられる、③学校教

育では日本のアジア近隣諸国への侵略などを「社会発展の規則」の枠組みから捉える傾向があり、それゆえ日本人を「道徳性」「社交性」の面からネガティブに評価する一方、「前衛性」「先進性」の面からポジティブに評価する傾向をもつ、④近年、学校教育の影響は低下しつつあり、反日感情の形成に影響を与える因子として、学校教育以外についても考察する必要がある、などの主張がなされた。

これを受けてディスカッションでは、①「反日感情」として現われる対日イメージに対して、SD法で用いるイメージ概念を適用し説明することは妥当かどうか、②反日感情の規定要因として、学校教育以外にどのようなものが考えられるか、などの議論がなされた。

石井健一会員は、報告の目的を次の2点から説明した。すなわち、①中国における日本ブランドの意味や「西洋」と「日本」の位置づけについて、ファッション雑誌の内容分析と6都市で実施した社会調査から明らかにする、②「インターネット愛国主義」など、新しいメディアが対日意識に及ぼす影響が存在するかどうか、2005年に上海で実施した調査結果を用いて検討する、というものである。討論および結論として、①「日本」ブランドが他の欧米ブランドとあまり差別化されておらず、ポピュラー文化や日本ブランドが反日感情と結びつけられる状況にはなっていない、②「愛国心」の強さと反日・排外的な意識とは相関が見られず、両者は心理変数としては別次元のものといえる、③インターネット利用者の愛国心や反日感情が強いという証拠は得られなかった、④ただし、先の李洋陽会員の結論とは逆に、教育が何らかの役割を果たしているといった示唆

が得られた、というものであった。また、今後の課題として、①「愛国心」「民族主義」をどのように測定すべきか、②反日意識の地域差をどう捉えるべきか、③メディアの影響をその内容から考察することの必要性などが示された。

ディスカッションでは、①「愛国心」や「排外主義」の概念および両者の関係に関して議論が深められ、また、②石井会員が実施したアンケート調査について、その詳細の確認とともに、ファッション雑誌購読者層を対象とした「愛国心」調査の実施など、さまざまなアイデアが提起された。

第二部に移ろう。飯田哲也会員は、ここ20年余りの中国に関する論考をまとめるなかで、①中国全体のマクロな認識の明確化、②生活の多様性と多様な変化動向の具体的な整除、③最近の中国における多様な社会問題についての研究の積み上げを理論的な課題とする。そのうえで、1990年代の国民生活について、とくに階層・階級分化、消費、教育の側面を巨視的な視点から取り上げ、現代中国の生活変動に関する理論的枠組みを構築しようとする。

本報告では、とくに①の課題が中心的に取り上げられ、国民生活におけるマクロな変化と、それに関連した生活レベルの変化を、いかなる社会事象から、いかなる方法に基づいて捉えるべきかが考察された。

具体的には、「階層分化」をめぐる、①「階層・階級」概念の検討、②収入・消費や教育へ着目する意義の説明、および、③収入・消費や教育の変化動向にかんする分析方法の検討がなされた。

報告を受けてディスカッションでは、①中国における1990年代の意味について、また、②中国の「階層・階級」を、

ポスト冷戦構造時代における東アジア諸国の中間層の生成とどのように関連させて理解すべきであるかについて、さらには、③東アジアの社会階層研究における「消費」概念の曖昧さなどについて議論がなされた。

坪井健会員は、①中国や日本などで実施されてきた留学生に関する政策の変遷や、②中国留学生の「送り出し背景」の変化などを整理し、また、③15年にわたる留学生調査の成果からその実態や意識を明らかにしつつ、在日中国人留学生の動向について考察をおこなった。

その内容について、①では、中国の改革開放後の留学生派遣政策、1983年の日本の留学生受け入れ政策、2003年以降の日本の入国管理局による中国人就学生・留学生の入国制限など、留学生に対する政策の変遷が説明された。②では、アジアにおける高等教育の急速な大衆化や、上海、北京、華南、東北地方などでの富裕層形成といった地域変動が指摘され、2回にわたる日本留学ブームの出現、高等教育のグローバル化にともなう在日アジア人留学生の減少などとも関連させて、留学生の動向が動的に示された。③では、中国人留学生に関するさまざまな「虚像」を、一次データを用いて次々と反証していった。

報告を受けてディスカッションでは、①在日留学生の大学間での質的差異、②理科系と文科系で異なる留学生動向、③留学生の「実像」にみるプラスイメージ析出の必要性、④2006年度から中国の大学院学費が有料化されることの影響、⑤中国の留学斡旋会社の調査の必要性、⑥「全国総合開発計画」に代わって新しく作成される「国土計画」（国土交通省）と、留学生政策に対する「国土計画」の影響、などについて議論が交わされた。

研究集会2日目については、当日、司会を務められた東美晴会員より概要報告の寄稿をいただいた。

～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～

## ●研究集会（2日目）について

### 東 美晴（流通経済大学）

日中社会学会秋季研究集会の第2日は、11月29日、流通経済大学の新松戸キャンパスにおいて行われた。当日は、首藤明和（兵庫教育大学）の「漢人『家族圏』の形態と論理—その重層性と伸縮性に注目して」、陳立行（日本福祉大学）の「中国における「社会福祉」から「社会福祉」への転換について」、中村則弘（愛媛大学）の「民衆文化と中国の社会変動」の3本の報告があった。

首藤明和氏の「漢人『家族圏』の形態と論理—その重層性と伸縮性に注目して」では、父系のタテの系譜によってその集団の存続原理が説明されてきた漢人家族に対し、家族集団の実体的な有り様を規定するものとしてヨコの系譜である姻戚関係がもたらす機能に注目し、父系＝公の側からは語られることがなかった家族規範を整理、明確化させるとともに、現代社会の家族の中で実際にどのように機能しているかを考察しようというものである。首藤は論理構成にあたり、費孝通の漢人の個人を中心とした社会関係のあり方（社会圈子）と、個人を中心に類別される多様な二者関係の中で生成する行為規範（差序格局）へと立ち戻り、家族内部での女性を中心とした社会圈子に注目した。これを受け、ディスカッションにおいて、陳立行氏から旧時の「国舅」の権力に関する指摘があ

った。また、家の看板としての男と、それを支える財力や威信を提供するものとしての女の「社会圈子」という議論も出た。

陳立行氏の「中国における「社会福利」から「社会福祉」への転換の可能性について」は、市場経済の進展により資源の再配分の必要性が生じた現在の中国を、Welfare（福利）からWell-being（福祉）への転換期と措定し、中国における社会福祉モデルを模索しようというものであった。現在、福祉事業の市場化による有料サービスを含め、都市・農村間、個人間の格差に基づく欲求の差異を認めた多様な福祉サービスが展開されつつある。このような多様な福祉モデルの中には、かつて氏族の公田においてその利益分配に預かることができる範囲が限定されていたように、資源配分資格における排他性があることが問題として指摘された。これは、たとえば急激に都市化が進行した郊外等では土地を失っても戸籍上農民のままにおかれている人が存在するが、これらの人びとが地方分税のために福祉から排除されていくような現象として見られる。この意味で、多様な福祉モデルは不平等と差別を再生産する懸念があると指摘する。

中村則弘氏の「民衆文化と中国の社会変動」は、中国の社会変動、あるいは社会主義と市場経済という一見矛盾する制度の安定的併存の文化的土壌として、複数の価値体系が併存する中で特定の組み合わせを利用し生活指針を形成するような民衆の生き方が関わっているという議論である。氏は北京近郊農村において起こった「ミイラになった老婆」のトピックを通し、これを語る。すなわち、本来裏の世界のものである「民間のシャーマンのミイラ化した遺体」の扱い

巡り、行政が死の穢れをたてに受け入れを拒否する村民（民間信仰的？）と、母の遺言を守ろうとする遺族（儒教的？）の調停を行ったという椿事である。もう一方の文脈では、老婆は富農出身であり、文革中に村民から批判を受け一旦は北京に移住した身である。いわば、老婆は死に際して強烈な伝統性の実践によってあらゆるものに対し異議申し立てを行ったことになる。それを、公でもあり近代でもある行政が苦々しくも治めるのであるが、きちんと治まるという構図ができあがっている。中村はこれこそが中国だと指摘する。

三氏の議論は、総じて「中国とは何か」に対するそれぞれの現時点での回答であったように思う。

## ■日中社会学会のあゆみ

### 日中社会学会25年(1) 「学会設立」

根橋 正一(流通経済大学)

日中社会学会が成立してすでに四半世紀の時が過ぎ去り、中国研究を専攻する社会学者多くが参加し、質の高い研究が次々と成果を世に送り出されている。そして、今また学会一丸となって大きなプロジェクトに取り組んでいる。この25年間の日中の社会学界の変化、研究状況の変化の大きさを感じている。私は当初から学会に関わりをもつことになり、幹事・理事・会長として学会に深く関わってきたし、私自身の研究はこの学会の活動から多くのものを得てきた。

ニューズレターの編集の方からの提案を受けて、思い出を語るほど偉くもないし、年でもないと抵抗しつつ、日中社会学会発展の過程の話を思いつくままに、記録と記憶によって記述することにした。

まず、学会形成のころから始めよう。1980年の『日本社会学会ニュース』94号に「日中社会学会(仮称)結成のよびかけ」と題する記事が掲載された。この呼びかけがどのような経過でなされたかについては、私は参加していなかったので知るところではないが、社会学会の中では友好訪中団については知られていた。すなわち、1979年3月15~18日に北京で社会学座談会が開かれ、中国における社会学研究の再開への道が開かれたこと、その同時期に日本の社会学者友好訪中団が北京を訪れていたというのである。とにかくその呼びかけは次の

ようなものであり、私はそれに応えて北海道大学における結成の会議に出席することにした。

### 日中社会学会(仮称)結成のよびかけ

昨年3月、日本社会学会の有志による「友好訪中団」が、北京において費孝通、吳沢麗両氏と会談した際、中国社会学研究会が発足した直後であったと報らされたことは、この学会ニュースや『社会学評論』の報告などで会員各位もご承知のことと存じます。

その後、日本社会学会の会員のなかから、この際、日本と中国の社会学者の学問的交流を目的とする「日中社会学会」

(仮称)を結成してはどうか、という話が持ち上がっています。とりあえず次の者が発起人となって、御参加希望の有志を募り、9月14・15日北大にて日本社会学会大会が開催されるときに、準備会を構成する予定です。

参加御希望の方は、その旨左記の所へ御一報願います。(住所、島津猛)

発起人(ABC順)

青井和夫・近沢敬一・江沢潔・福武直・石川晃弘・柿崎京一・川越淳一・蔵内数太・牧野由朗・島津猛・余田博道

(『日本社会学会ニュース』No. 94, 1980. 4. 25、8ページ)

1980年9月15日、当時まだ大学院生であった私は、「省級革命委員会と軍の役割」というタイトルで、文化大革命収拾過程で形成された各省レベルの革命委員会の人事的分析を通して、中国社会がどのような方向に向かおうとしているのかについて、口頭発表をした。それは「アジア・ソ連」という部会で、島津猛先生とご一緒であった。島津先生の発表タイトルは「農業集団化に関する若干

の考察—ソヴィエト・中国の比較検討を中心に—であった。

口頭発表を終えて私は、北海道大学社会学研究室にて開催された日中社会学会設立会議に参加した。研究室は薄暗い感じで、部屋の隅に座ることになった私には、窓を背にした発起人の先生方の顔はあまりよく見えなかった。出席していたのは 19 名、会を進行した座長は余田先生であった。

その会議のなかで、最初の会員 34 名が参加する日中社会学会が設立され、世話人・代表世話人・幹事・事務局・事務費などが決まった。幹事の選任の過程で、福武先生が突然「根橋君は来ていますか?」と呼ばれ、びっくりしながら返事をする、幹事の末尾に私の名前が付け加わることになった。こうして私は最初から日中社会学会の歩みに参与することになった。このときの主な決定事項は、『日中社会学会会報』No. 1 (1980. 11. 1) に記されている。

1. 世話人 代表世話人：福武直  
世話人： 余田博道  
青井和夫  
牧野由朗
2. 幹事 常任幹事：石川晃弘  
柿崎京一  
島津猛  
江沢潔  
幹事： 吉井藤重郎  
渡辺正  
根橋正一

3. 事務局  
中央大学文学部・石川晃弘研究室

これから、文字どおり手づくりの学会の過程が始まった。 (以下次回)

## ■調査ノートから

### ミイラになった、人騒がせな婆さん

中村 則弘(愛媛大学)

先日、北京から約 50 キロメートルの村で見聞したことがらである。

町並みから奥に入った村に、その家があった。母屋のなかには老婆のミイラがあるのではないか。出羽月山などの「即身仏」が、ベッドに横たわっていると思ってももらえれば適切かと思う。

老婆は 1905 年、現地に生まれた。富農の出身で、文化大革命中には批判闘争の対象ともされた。そのためもあって、息子を頼り、76 年には北京に移住していた。

家族については、長女、長男の嫁、夫、そして次女がすでに病没している。本人も、38 歳のときに大病を患ったが、義理のおばによる民間治療で完治し、菜食精進を続けた。そののちは、自分自身が病氣診断を行い、漢方治療も行っていった。文化大革命のときには、批判闘争を行った村民も、自分の息子が急病になり、医者が間に合わないとなるや、この老婆の治療を頼ってきていたとなどの逸話もある。

齢を重ねるに従って超能力をみせたと家人は伝えている。83 年には交通事故にあった孫娘が無傷であったことを予見していたなどが何よりの理由らしい。85 年の春には「私は、修行を成就させた。『肉身』となった」とまで語った。

1992 年 11 月、老婆は体の不調を訴えた。医師の診断では急性肺炎であり、入院治療を行うこととなった。入院中、嘔吐を繰り返し、赤いオタマジャクシ状の

ものや黒い粟状のものを吐き出した。4日後には本人の強い希望で退院し、農村の家の方で点滴治療を行った。これは「この家にもどきないと、みんな後悔するぞ」との老婆の強い言いつけがあり、危篤状態に陥ったからである。帰宅後、病状は快方に向かったが、数日後、異常な排便を始めた。粘液状のものを大量に噴出したのである。それは死亡するまで続いたという。それとともに、顔色も茶褐色に変わった。また、3時間にもおよび痰を吐き続けた。それには各種の色の塊が混じっていた。

発病から10日後、老人は家の者に赤い紙で200の大きな花を折らせた。翌日には、それを庭で家人に焼かせた。その30分後には、家人ともども南の空にばら色に燃え盛る火の玉をみた。直径は1mほど、3~5分の時間だったという。それから3日後、老婆は家人に言いつけ、農村の家から北京へともどった。北京にいった後は絶食を続けた。この出発の前日には、家人に全身を拭かせ、全身の主用なツボに軟膏を塗りこませた。

発病から18日目の夜、自分から「私は眠りたい、もういらぬ」と言いつつ酸素吸入の管を抜き、目を閉じた。それとともに、呼吸も止まった。享年88歳であった。

死後は、24時間、体温が低下せず、一週間の後にも遺体は弾力をたもっていた。以後数ヶ月、老婆の遺体からは、自然に脱水と脱油脂が続いた。何もしないままに、ミイラ状態になったとのことである。

さて、死体を家においたことで大騒ぎである。このあたりの風習では、外地で死去した場合、村で葬儀などは行わず、遺体は直接に墓地に埋葬することになっていた。しかし、家人の側が、「私は

永遠に生きるのだ、火葬には絶対にしないでくれ」という老婆の日ごろの言いつけに従い、断固それを拒否したからであった。結局、両者の調停には、行政の側も一役かうことになり、自宅の一室に遺体を安置したままにしておくことで、一応の決着はみている。

---

あたかも霊異現象のように家人は語っているが、いくつも伏線があったようである。この老婆は間違いなく、祈祷師や「神女」の類とみてとれる。このミイラ化に関連してだが、老婆の義理のおじは科挙合格者で、道教の不老不死の術に凝っていたという。大病を患ったおりに、このおじが見舞と治療方々、老婆のもとに通っていたとの周囲からの話があった。どうもこのときに、おじから「不老不死化」を含む数々の術を教えてもらい、祈祷師まがいのことを行つたうえに、身をもって実行に移したようである。

なかなかもって、人騒がせなお婆さんである。だだ、家人は真剣だったが。

## ■留学雑感

### 書評特大号

池本 淳一  
大阪大学大学院 博士課程  
中国社会科学院 客員研究員

大家好！池本です。1月下旬現在、私は北京から大連に移り、初調査を行っています。二月初旬からは撫順へ参ります。北京では、朝は公園で武術を習い、昼は中国語の自習、午後から科学院に登校し読書三昧していました。というわけで、今回の雑感は北京で乱読した中からいくつかの研究を紹介してみたいと思います。

現在、中国では階層研究、特に社会構造変動（「転型」）を視野に入れた数量的な実証研究が盛んで、毎月階層研究の著作が出ています。まずはその中から二つ取り上げます。

まず一つは陸学芸主編の『当代中国社会流動』（2004年、社会科学文献出版）です。本書は前半部分は移動表を用いた分析、後半は各階層の詳しい分析に焦点が当てられています。個人的に興味を持った章は、石秀印、李炜執筆の「第三章 中国职业结构的趋高级化及原因分析」です。「職業構造の高級化」とは、社会全体の職業数がブルーカラーよりもホワイトカラーの方が多くなってゆくことであり、またホワイトの中でも事務職よりも技術職、そして管理職がより多くなっていく現象です。現在中国ではこのような高級化の「傾向」が見られるものの、それは他国とは異なった様子を見せているそうです。例えば他国の場合、高級職の増加に伴いブルーカラー職が減少していくのに

対して、中国ではサービス業（商業人員）や事務職等の中級職業の増加は目覚ましいものの、専門職や管理職などの高級職の増加はそれほどでもない、ということです。また、ブルーカラーの減少も顕著ではありません。つまり中国の職業構造は、膨大な下層職を残したまま、中下層職のみが急激に増加しつつある点に特徴があります。現在、多くの農民・工人階層出身の若年労働者は容易に都市の服務員や事務員になることが出来ます。しかし、彼らは老板や熟練職へと進むことはまれです。その理由の一つは、このような職業構造にもあるようです。

もう一冊は、李培林、李強、孫立平等著『中国社会分層』（2004年、社会科学文献出版）です。こちらは様々な研究者によるアンソロジーで、『当代中国社会流動』が全国規模の大規模調査に基づいているのに対して、こちらは調査地点もサンプル数も各種各様、分析も職業威信スコアや消費傾向、不平等感など多岐にわたっています。では、これらの中からいくつか印象に残ったものを紹介したいと思います。

李培林氏によれば、現在の中国の階層秩序の特徴はポスト工業社会、工業社会、農業社会の特徴が同時に並存している点にあるそうです。なんだか、昔、指導教官の厚東洋輔が日本は明治時代、西洋文化を直輸入し、西洋文化と日本文化が並列的に存在したモザイク状の「ポストモダン」的状況から、日本的「近代」、という形で徐々に「モダン」な状況へと移行していった、と話していたことを思い出しました。本著には職業威信スコアの測定を試みた論文も収められており、例えば李強の「转型时期冲突性的职业声望评价」（p105-126）では、北京市民に

対して100種類の職業の威信スコアを測定したものです。結果としては、他国と同様に、科学者、大学教授、エンジニア、物理学者、医者等が上位に上がっていました。面白かったのは、他国なら威信スコアが比較的高いはずの官僚があまり高くなかった点です。ここにも官僚の構造的汚職に対する市民の不満が表れているようです。また、十年前の調査と比較した結果、かつて一位であった作家が、今回調査では18位に、七位だった画家は19位に転落している点も、ああやっばり市場化が進んでいるんだな、と実感させます。また、D.Treimanの威信スコアの国際比較研究への反論もあつたりと、かなり読み込ませる内容でした。李春玲の「社会政治变迁与教育机会不平等——家庭背景及制度因素对教育获得的影响(1940~2001)」(p393-424.)では、各年代ごとの教育機会の平等化を扱っていました。結論としては、49年から78年までは教育機会の平等化が進んでいましたが、78年以降その傾向は弱まり、現代では逆に教育機会は出身階層の影響を受ける不平等化の傾向にあるそうです。計画経済時代に推し進められた様々な「平等化」については賛否両論ありますが、こと教育の面に関しては、それなりの成功を収めていたことが確認でき、大変参考になりました。

次は私の研究分野で参考になった著作を二つ。

一つは『中国城市青少年弱势群体现状与社会保护政策』(2004年、社会科学文献出版社)です。これもアンソロジーですが、特に参考になった論文は張華の「待业大学生生存状态与就业对策研究」(p276-312)と徐章輝、毕先萍、韩勇、「城市青年失业群体现状及再职业扶持政策研究」(p313-358)です。張華論文

の対象は大学を卒業したものの、無職状態にある青年です。大卒無職者の原因として張は、社会が大卒者に提供しうる仕事の相対的な不足と、大学生が理想に合致しない仕事には従事したくない、という社会的・個人的原因を上げています。いくなれば大卒無職者は仕事の「選り好み」の結果、無職状態が続いている、という指摘です。私は今、若者に進学や就職に関する聞き取り調査を行っているのですが、彼らの多くは中学・高校・大学時代、朝六時から夜十時まで勉強漬けの日々を送っており、ほとんど趣味すら持てない生活を送ってきました。そんな彼らからすれば、「努力に見合った成功」を求め、妥協を拒むことは当然のことだと思います。ただ悲しい哉、努力した者のすべてが成功するわけではありません。そしてどうも中国には努力した末に敗れた「正当な敗者」を慰め、アスピレーションを上手に冷却する装置が不足しているように思います。常に上へ上へ、精力的に生きる中国若者を見て、どこか心配になってしまうのは、私が経済発展に対して悲観的な国から来たせいなのか、それとも三十に手が届く「プチおっさん」だからなのか。考えさせられますなあ。もう一遍の徐等論文も失業問題を扱ったものですが、こちらは広く失業青年一般へ量的調査を行ったものです。ここで目を引くのが、その失業原因です。57%の失業青年が失業を「自分から選択した」と回答しており、その自主退職の理由の第一位が、「当時の仕事に満足出来なかったので、仕事を換えようと思った」(63.4%)、第二位が「自分をより研鑽(深造)するため辞職した」(12.9%)となっていました。ここにも、職業への期待と自分自身への期待の高さゆえに、労働市場から撤退してしまった若者の

姿が見受けられます。

家族研究方面では、李卓の『中日家族制度比較研究』（2004年、人民大出版社）が参考になりました。著者の専門は歴史学ですが、明治期以降の中国と日本の家族に関する社会学研究をよく読みこんだ上で書かれており、学説史研究として高い水準にあると思いました。また日本家族の根本的な機能を「家業の伝承」、中国家族のそれを「生命（子孫、血脈）の伝承」として概念化し、この枠組みを元に相続、養子、婚姻などの家族制度や孝行、男尊女卑、家訓等の家族倫理を上手く整理しています。今後、中国家族研究の必読書として定着するかも、と期待しています。

また雑誌論文では、次のものが目を引き増しました。まずは黄海の「解密“街角青年” 一种越轨社会学和亚文化理论的研究」（青年研究，2005年第2期，中国社会科学院社会学研究所《青年研究》编辑部，43-48）。これは湖南省の長沙市某区「DY地区」にたむろしている無職・初中卒の「DY帮」へ参与観察を行ったものです。いうなれば中国版ストリートコーナー・ソサエティです。この論文では、普段ネットカフェや卓球場、ビリヤード場でたむろしている、どうみても仕事も勉強もしてなさそうな若者の生活を知ることが出来ました。例えば、チームのリーダーが、会員の面倒ごとや遊びの支払いを受け持つことで、ようやくメンバーにリーダーとして認められる、という点などは「相互」扶助や「上下」関係には還元されない中国の「帮」集団の特徴の一端が現れていると感じました。また、彼らが「DY帮」の中で、ボーリングやネットゲーム等のゲームの勝敗を通じて、盛んにチーム内での地位争いを行っている、という指摘も考えさせられました。

黄海によれば、彼らはそのゲームを通じた威信の上昇と下降を通じて、ある種の「社会流動」への欲求を満足させているのだ、ということです。彼らはいわゆる低学歴・不安定な家庭環境といった、「社会的排除」にさらされている青年たちですが、しかし彼らもまたこの変動激しい現代中国で生きる青年である以上、「做个有出息的人（ヒトカドの人物になってやる）」（p45）という気概を持っています。しかし彼らはそのような上昇の機会からは、徹底的に排除されています。そこで彼らは、同じような「共通の問題」を持ったもの同士で小さな「街角社会」をつくり、その中でスリリングな流動体験を得ようとしています。はたから見れば無意味な流動体験ですけど、では彼らはどうすればいいのか。ふと、アルバイト先でチーフ（時給は変わらず）になり、毎日無給の「残業」をしている知り合いのフリーターの子が「今の職場には自分は欠かせない」と言っていたことを思い出しました。

また赵芳、赵焯焯の「父母的过高期待与中学生的压力关系的研究」（2005年青年研究，第8期，中国社会科学院社会学研究所《青年研究》编辑部，11-19。）も、なかなか考えさせられる内容でした。これは南京市の中一から高二（職業高校の一、二年も含む）を対象に行った質問紙調査ですが、目を引いたのは、両親の子供の「趣味」と「友達」に関する態度です。調査によれば、72.1%の生徒の両親は子供が趣味を持つことを支持していますが、しかしその趣味の内容は、英語や文学など、勉強に関係するものに限られます。また、友達付き合いも、約六割の親が多くの友達と付き合いおうことを支持するものの、約二割の親は「成績の良い子とだけ付き合う」ことを支持して

おり、約一割は「勉強の時を除いて、友達付き合いは控えるように」と考えているということです。このような趣味や友達付き合いに関する態度が、家庭内での勉強に対する「圧力」を不知不觉に作り出しているのかな、と感じました。

以上ご紹介した著作・論文からも伺えるように、今、中国社会学では多くの調査研究が行われ、年々その質も高まっています。現在、日本と中国の社会学は、個人的・人脈レベルでの交流は盛んですが、研究レベルでの交流はまだまだだと感じます。今後は、日本と中国の研究者の共同研究が当たり前、みたいな雰囲気を作り出せれば、と考えています。そういうわけで、どなたか調査にお誘いくださいませ。質的・量的ともにそこそこなせて、なにより体力があります(笑)。と、猛烈アピールをしつつ、来週から氷点下二十度の撫順市へと出かけて参ります。それでは、また。

## ■事務局からのお知らせ

### ○ワーキングペーパー集の発行

このたび、『日中社会学会ワーキングペーパー集』を編集発行いたしました。試行的な段階にあり、今後のあり方についてはなお検討を重ねていくことになります。

それでも、研究発表の機会、研究交流の媒体が増えたことを、手前味噌ながら評価したいと思っています。

会員の皆様には、6月の大会や秋の研究集会に、今までよりも一層積極的に報告者としてご参加いただき、ワーキングペーパーをご執筆いただければと願っております。

また、「執筆者に意見や質問を寄せたいけれど、連絡先がわからない」という方は、メールにて事務局宛(永野または吉岡; 16ページをご参照ください)に送信いただければ、各執筆者に転送いたします。

活発な議論が展開されることを期待いたします。

坪谷会員、張会員も含め、自宅住所等の変更のご連絡をいただいている会員が数名いらっしゃいます。前号と同様に、ニューズレターでの掲載は控えさせていただきます。

## ■編集後記

今号から、「日中社会学会のあゆみ」の連載がスタートしました。本文のなかで紹介されていますように、日中社会学会、すでに四半世紀の時間を刻んできました。多くの方々のご尽力があったからこそ、今日の姿があるということを痛感しました。私にとって学会の仕事は、決して楽しいことばかりではなく、ときどき気分が塞ぐこともあるのですが、この

記事からは大きな力をいただいたような気がします。

今年も、研究大会や研究集会の開催、機関誌、ワーキングペーパー、ニューズレターの発行、学会HPの更新など、さまざまな事業に取り組んでまいります。ご支援ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

fax:089-922-5415 (大学事務局)  
事務局・業務担当：吉岡智子  
e-mail:nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp  
tel・fax:089-927-9366

日中社会学会・郵便口座  
口座記号番号：00140-9-161801  
加入者名：日中社会学会  
日中社会学会・公式HP

---

### 日中社会学会ニューズレター No.46

発行：日中社会学会事務局  
〒790-8578  
松山大学人文学部永野武研究室  
e-mail:nagano@cc.matsuyama-u.ac.jp  
tel:089-926-7451 (研究室直通)

◎編集担当  
首藤明和 (shuto@soc.hyogo-u.ac.jp)

発行日：2006年2月